



Title	里親制度の家族社会学：養育家族の可能性〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	園井, ゆり
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第6889号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53939
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuri_Sonoi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 園 井 ゆ り

審査委員	主査	特任教授	金子 勇
	副査	教授	平澤和司
	副査	准教授	水溜真由美

学位論文名

里親制度の家族社会学—養育家族の可能性—

本論文の目的は、親からの虐待や大震災などが原因で社会的養護が必要になった児童を養育する家族が、従来の日本において主流であった近代家族から派生した里親制度のもとで、今日の日本社会においてどのように機能するかについて、幅広く家族社会学と福祉社会学の観点から検討を行い、この構造と機能に関する事実研究から得られた諸命題を明らかにすることにあつた。

研究の特徴の一つには、いわゆる「パーマネンシー」の概念を論文全体の柱として導入されたことが挙げられる。ここでの「パーマネンシー」とは、児童にとっての養育者や養育環境を安定的で継続的に保つという考え方を指す。その「パーマネンシー」に立脚した政策の効果に関する既存研究が広く渉猟されている点は、日本ではこれまでにない学術的成果である。とくに数十ページにわたり要点をオリジナルな表形式で整理された「パーマネンシーと要保護児童の措置基準に関する先行研究」、「親族里親に関するおもな先行研究」などは、今後ともきわめて有益な示唆を与えるであろう。

里親制度の概説、家族研究学説、里親家族先行研究などのまとめの後で、要保護児童を委託された里親が形成する家族を「里親家族」として、九州から北海道まで全国いくつかの都市における「里親家族」調査結果が示された。里子を1年以上の長期間にわたり養育した経験を持つ里親を「長期の里親家族（long-term foster family）」として、「養育家族（family of fosterage）」という概念をこれに充当する観点から、著者が2008年から2010年にかけて行った質的調査法を駆使したインタビュー調査結果に基づき、「養育家族」の機能および形態が解明されている。インタビュー調査は51世帯の「里親家族」を対象に実施され、調査実施に際しては、各都市の里親会から全面的な協力が得られたことが特筆できる。なぜなら、このような実証的研究が日本ではほとんど行われてこなかったからである。

調査の際に設定された「養育家族」に関する仮説は、家族機能と家族形態の両面に分けられている。調査結果からは、血縁関係が存在しないにも関わらず、里親による里子に対する社会的規範や社会的価値などの継承を主軸とする社会化機能が鮮明に認められた。しかも将来にわたる里親による里子に対する援助を通して、里親と里子との間に親と子の一体的な関係性が形成されていたことも判明し、総合的にみて「養育家族」が里子の社会化役割を担う存在として機能することが明らかになった。これは

非血縁の親業の再発見 (reparenting) といえるものである。

さらに「養育家族」が将来的な里子の援助と実親の支援までを含むことが手堅く論証された。これらの事実発見により、非血縁の「養育家族」が、児童虐待や大震災により実親との切断を余儀なくされた子どもたちの社会化にも、有効な機能をもちうる新しい家族形態であることが分かり、政策的な支援の根拠を提供するものとなった。

今回調査された「養育家族」は、現世代が保有する文化資源を次世代に継承する役割をしっかりと果たしていることが確認された。それゆえ、たとえ血縁関係にはない「養育家族」でも、「近代家族」と同様に、家族が担う子どもの社会化機能を担っており、次世代育成という少子化時代に特記される社会的役割は健在であったとまとめられ、この意味で「危機対処力」を十分に有する家族形態として位置づけられる。

里親家族調査に関する若干の先行例では、里親家族の機能に関する研究にのみ主眼がおかれ、里親家族の歴史社会的な位置づけが十分解明されてこなかった。その反省に立った本論文では、論文の最終章で家族の形態に関する歴史社会学的研究を同時に行うことにより、現存する里親家族の実態を時間軸のなかでも包括的視野を通して検討し、先行研究の不備を実証的分析に基づき修正補完している。すなわち本研究では、いくつかの地域間比較調査をもとに、里親家族の機能および形態に関する検討を行い、歴史的な家族社会学の理論的系譜の中に里親家族を位置づけることを試みたことで学術的体系性がしっかり得られたと判断できる。

里子を得てからの里親としての親業の復活が、解体に向かい始めた近代家族の中で新しい家庭建設者 (homebuilder) の機能を賦活する。学術的にも政策的にも本研究の更なる展開への期待はそこにある。

日本における家族社会学や福祉社会学でまだ誰も手をつけなかったこのような実証的研究が持つ意味は確かに大きいものがある。

以上のような審査結果により、本審査委員会では、全員が一致して本申請論文が博士 (文学) の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。